

はじめに

障害のある人びとの発達保障の考え方と実践がかたちをなすのは1960年代のことであり、直接的には近江学園やびわこ学園のとりくみを水源として広がっていきました。発達保障の広がりや深まりを確かめるために、この本では歴史に学ぶというスタイルをとりました。発達保障の歴史を学ぶということは、発達へのねがいに潜む矛盾や苦悩に目を凝らしながら、人びとがつくり出してきた「ねがいの結びめ」を発見していくことではないかと思うのです。ここでは、一人ひとりのねがいや苦悩が打ち消されることなく、社会のなかで共有されていくことで、人と人がつながり合っていくありようを「ねがいの結びめ」と表現してみました。

この本では、わたしたちの社会のなかで「ねがいの結び目」がつながれていく歴史の過程を「発達保障の道」として理解してみたいと思います。その際、できるだけ固有名詞のある人びとのねがいや経験に即して社会を眺め、歴史をたどることにこだわります。

た。名前の知れた人ばかりをとりあげるのではありません。日々の生活を背負いながら、発達へのねがいをもち続けた無数の人びとの声に耳をすまし、その生き方に学びたいとの思いからです。

とはいえ、これからみていく歴史が、発達保障の歴史の全体ではありません。また、「発達保障」という言葉が生まれてからの約50年間だけを眺めるのではなく、「発達保障の道」を探るための時間の軸を幅広くとりました。そして、発達保障の歴史を語るうえであまりとりあげられてこなかった「ひと・こと・もの」に眼を向けました。その歴史を生きた人びとの「ねがいの結び目」をたどることで「発達保障の道」の幅と奥ゆきを広げることができないか、そのことを通して、わたしたちがより多くの人たちと広く手結びながら発達保障の道を歩んでいくために必要なことを考えたいと思ったからです。日本民衆思想史を切り拓いた安丸良夫やすまるよしおはいいます。「歴史研究は、所詮は後世の人間から見た後知恵であり、しかもつぎつぎとつくりなおされる後知恵ではあるが、しかし、それはのちに得られた知見をふまえて物事を考えなおすということを意味しており、そこには平凡な私たちをすこしずつ賢くしていく効用がある」（『現代日本思想論―歴史意識とイデオロギー』岩波現代文庫、2012年）。

歴史を学ぶことが、目に見えて何かの役に立つことはありません。歴史が与えてくれるのは、時間という変化のなかでものごとの意味を理解し、問題をとらえるために、立ち止まってじっくり考える経験なのです。目に見える変化やわかりやすい成果が求められる今こそ、歴史という回り道を歩きながら、発達保障が大切にしてきた「ねがい」を確かめ、みんなで「歴史をつなぐ、社会をつくる」ために必要なことを語り合うことに自覚的でありたい。「変わることに」「変わらないこと」だけをとり出すのではなく、その意味や価値をも問う歴史の知は、みんなで語り合い、自分たちで学び合うという営みをくぐることで、わたしたちの発達を見る眼に深まりをもたらし、発達保障のとりくみを豊かにしてくれるはずです。

それでは、歴史と対話しながら、今を生きるわたしたちの生活や実践にも貫かれていく発達保障の道を探っていきましょう。その道ゆきで、どのような「ねがいの結び目」に出会うでしょうか。発達保障の歴史へと通じる道は、いろいろなどころにひらかれています。この小さな本が、発達保障の道を探るひとつの手がかりとなれば幸いです。

この本では、歴史の文脈において登場する個人の敬称は省略してあります。また、今日において使用すべきではないと判断される用語もありますが、問題の歴史的・社会的な背景を考えるために、そのまま引用・記述しています。